

# 開府 名古屋の都市づくり

— 家康の考えたこと —



池田 誠一

## 【12】平和都市・名古屋…原点・家康の「志」

### 1 三英傑の目指したもの

名古屋は、信長、秀吉、家康の故郷として全国に知られています。この3人が、共通して求めていたものが、「天下」でした。信長は1567年、天皇からの綸旨を受け、岐阜城で「天下布武」というテーゼを掲げました。この言葉は、一般に、武力をもって全国を制すると理解されがちです。しかし、「布」は「しく」と読み、「武」は「七徳の武」とされます。即ち、①暴を禁じ、②兵をおさめ、③大を保ち、④功を定め、⑤民を安んじ、⑥衆を和し、⑦財を豊かにするという7つの徳をもつものとされているのです（『春秋左氏伝』）。信長は、「岐阜」の命名など、中国故事をよく理解していました。武という字も、よく見れば「戈を止める」と書くのです。

つづく秀吉は、信長の遺志を継ぎましたが、「武」の実現には至らず、その志は家康が引き継ぐことになりました。家康という人物は、徳川時代の反動からか、あるいは判官びいきからか、明治以降は「狸親父」として悪いイメージを背負

っています。しかしその人生をよくみると、信長の「武」と同じものを目指していたように思えるのです。今回は、この連載の終わりに当って、名古屋を造った人・家康の思想の原点を追ってみたいと思います。

### 2 家康の想い

#### (1)「厭離穢土 欣求浄土」

家康が若い時から使っていた旗指物があります。白地に「厭離穢土 欣求浄土」と墨書したものです。最後の戦争になった大坂夏の陣でも、岡崎からの例に倣ってこの旗を掲げたとあり、家康は生涯この旗を掲げて戦ったようです（図1、文献①）。

この言葉は、彼が19才の時、桶狭間戦の敗戦の後、織田方に追われて逃げ込ん



図1 「徳川家康」(山岡荘八歴史文庫)の表紙の旗印(画：村上豊)

だ岡崎の大樹寺で、登誉上人からもらったものです。寺を取り囲まれ、もうこれまでと切腹を覚悟した家康に、「厭離穢土 欣求浄土」と書き、これまでの武人としての心を聞き、諭した問答があります(文献②)。要約して紹介すると、(公：元康→家康)

師：戦さは殺害のためか？

公：武人の心実に然り

師：殺害は何ゆえに？

公：ついには天下を領せんがため

師：天下を領して何するぞ？

公：家門興隆、子孫繁栄、後世名誉…

師：天にかなわぬ国の強奪は盗人の行為ぞ  
非道なら子孫不伝、栄華春夢！…

と続きます。そして、以後、この仏教の浄土を求める言葉が家康の旗印になりました。

家康の生き方をみると、いろいろな場面で「不戦」という思想を強く感じます。その総まとめが大坂の陣の後の「隠武」の宣言になりました。そして250年に及ぶ泰平の世が実現することになったのです。

## (2)「木曾」のプレゼント

その家康が、晩年、かわいがった息子たちがいました。関ヶ原戦の年に生まれた9男の義直を筆頭に、頼宣、頼房の3人です(図2)。とりわけ義直には、4男忠吉の死後、対大坂戦の要とされた尾張を与えました。

義直の婚儀は1615年の春。大坂戦含みで名古屋に来ていた家康は、その婚礼の行列を櫓から見ていたといします。そして翌日には上方に出発。つづいて義直も大坂に向かいま

した。

戦いに勝ち、一国一城令を出し、隠武の宣言をした後、家康は名古屋に立ち寄りました。家老たちを集めて、婚儀でどのくらい出費が増えたかを質し、その代替として「木曾の山と川」を与えたといします(文献③)。当時、すでに美濃の一部は尾張藩の家老たちに与えられつつあり、結果としては木曾への経過地等が尾張藩になりました。そして石高は61万9,500石と、大名中第4位になり、加えて婚礼祝いになった木曾は石高に計上されず、木材は藩の大きな財源になったのです。

## (3)名古屋への想い

そもそも名古屋城はなぜ造られたのでしょうか。云われるように対大坂戦のためでしょうか。

家康は、苦勞の人、忍耐の人といわれます。6歳に熱田での人質で始まり、今川義元、織田信長、豊臣秀吉に従い、関ヶ原戦は60歳近くになっていました。それでもその直後から大坂戦対策を始め、名古屋築城の数年前には各地の城の修築をほぼ終わっていました。その後は江戸城、駿府城という自らの居城を整備していたのです。

こうみると、名古屋城は計画的ではなかったようにみえます。どちらかといえば山下氏勝の提言でしょうか。思いついたように築城を始めているのです。推察すれば、名古屋城は大坂戦対策というより、かわいい息子の治める城と町をつくることに目的があったように思えます。江戸が秀忠のものなら、名古屋

は義直のもの…というくらいに。そのためではないかと思われるのが、名古屋城は防御のためというよりも立派に見せるための城であったことや、城下も江戸と並ぶ、非軍事的な碁盤割の町が造られたことです。私には、家康、義直、名古屋という三つが、何か特別の想いでつながっているようにすら思えます。

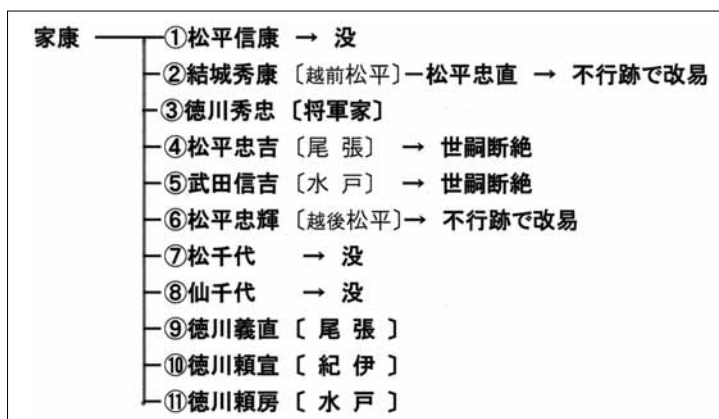


図2 家康の男の子供達。多くが死に又改易になった

## … 目覚めた時 …

さて、開府紀行の最後に、19才の家康が仏教に目覚め、人生の方向を決めたという岡崎の大樹寺を訪ねてみたいと思います。

## 〈寺へ〉

名鉄本線の東岡崎駅を降りて、バスターミナルから大樹寺方向のバスに乗ります。途中、井田という所を通りますが、ここでの戦いで戦死者を葬ったことが、後の大樹寺を造ることにつながりました。

バスを大樹寺停で降り、次の信号を左に進みます。200<sup>メートル</sup>程行くと右側に大きな大樹寺の山門が見えてきます。大樹寺は、1475年、家康の5代前の松平親忠が創建した浄土宗の寺で、徳川家の菩提寺になりました。見上げる山門は3代将軍家光が建てたもので、初期徳川幕府の威力を感じます。

山門から進むと大きな本堂があります。堂内に入ると正面両脇に、「厭離穢土」「欣求浄



大きな大樹寺の山門



大樹寺本堂。右・左と墓が下っているのが目につく

土」の幕が目を引きます。本堂は、幕末の火災があり、本尊もその後京都から移された平安時代の阿弥陀仏です。家康は死ぬ前に、遺体は久能山に納め、位牌は三河大樹寺にたてるよう遺言しました。方丈には歴代将軍の位牌が並んでいますが、大きさはご本人の臨終時の身長とされています(家康は159<sup>センチメートル</sup>)。

## 〈寺から〉

本堂を出て右に進み、突き当たりを右に行くと、松平八代の墓が並んでいます。松平初代になった親氏は、拠点だった松平郷に「天下和順…兵戈無用…」という願文を残しました。この時からすでに「天下・平和」が視野にあったのでしょうか。引き返してまっすぐ行くと右側に多宝塔が見えます。1535年、家康の祖父清康が建てたものです。バックすると山門です。



松平八代の墓。手前の家康の墓は最近建立した



当時のおもかげを残す重文の多宝塔

大樹寺は、本堂、山門、総門がまっすぐで、その先に岡崎城があります。そして本堂から城が見えるよう、家光の再建時に工夫されました。山門から目を凝らすと、総門の中に確かに城の天守が見えます。この眺望は岡崎市がピスタラインとして守っているそうです。





山門から総門の中を通して岡崎城の天守が見える  
(クレーンの向う)。家光が希望したという

中間は小学校になっていますが、元は塔頭が並んでいたようで、総門は運動場の向こう側です。

山門から学校を周って、その総門に行きます。桶狭間戦の後、この総門前で織田方と寺の僧との争いがありました。当時は寺僧500人。見事追い返して家康を守ったといえます。この時から、家康は「欣求浄土」の土に生まれ変わったのでしょうか。道を東に進むと、大樹寺のバス停に戻ります。



総門と山門の間は小学校になっている

家康は、名古屋に泰平に時代の町を造りました。まっすぐな道路、川には橋、町人が主役になるような町です。道は狭くして繁盛を優先し、海への堀川を掘って物流を易しくしました。そして、当時の城下町では常識だった堀によって町を囲うことをしませんでした。都市づくりは戦争のためではなく、町の繁盛が目的だったのです。すべてに平和の時代を想定した町。そんな城下町は、当時はどこにもありませんでした。

目を世界に転じて、17世紀の初頭、平和時代のために造られた都市はあるのでしょうか。西欧や中国の都市は城壁や堀で囲む。それが、当時の世界の常識でした。

徳川1250年の泰平の世は、長い平和が続いたローマにならって「パクス トクガワナ」という時があります。その間、ほとんど戦争が無かった時代、それは日本より世界で高い評価を受けているのです。

名古屋は開府400年です。郷土出身の3人。信長、秀吉が求め、家康が造り上げたのは「平和」でした。そしてその具体像として造られた名古屋。それは、先がけて平和を目指したという意味でも世界的な都市といえます。私たちは、今一度、この平和都市の意味を理解し、見直してみる必要があるのではないのでしょうか。(完)

#### 〈主な参考文献〉

- ①新行紀一『大樹寺の歴史』(1984、浄土宗 大樹寺)
- ②成田敏圀「厭離穢土欣求浄土—家康公の平和思想」(2006、HP「岡崎学—岡崎を考える—講座」)
- ③徳川義親「尾張藩と木曾山」(1957、『東海 今と昔』所収)

## 連載を終えて

一年間、名古屋の生みの親である家康の考えを追って名古屋開府の姿をみてきました。まだ調べなければいけないことがたくさんあり、力不足の点はご容赦下さい。

戦国の世にあって、誰しものが泰平の世を求めました。しかし、それを実現し次の姿を描くことは容易なことではありませんでした。家康は、それを実現し、名古屋という町にその姿を示したのです。開府400年に当たって、改めて名古屋の町を見つめ直してみました。

池田 誠一

〈次回からは「名古屋地下鉄建設の物語」(仮)です〉